『老人と海』とクィアなカジキ

川崎　浩太郎

（要約）

アーネスト・ヘミングウェイは、男性的な作家としての側面が長らく取り沙汰されてきたが、男女の性役割の交代や両性愛、同性愛などの主題を扱った『エデンの園』の死後出版以降は、むしろこの作家やその登場人物たちの両性具有性やクィア性が注目されつつある。しかしながら、『エデンの園』とも執筆時期が一部重なる中編小説『老人と海』に関していえば、従来の寓話的解釈に基づいて、作家自身や登場人物たちの男性性への執着やミソジニーに着目する批評の傾向は大きくは変わっていない。本論は、雄として言及されるカジキが実は生物学的には雌であった可能性が高いということ、そしてヘミングウェイ自身もそのことを十分に認識していたという事実を手がかりとして、ヘミングウェイの複雑なジェンダー観やセクシュアリティ観の一端を『老人と海』に読み込む試みである。

＜キーワード＞アーネスト・ヘミングウェイ、『老人と海』、ジェンダー、セクシュアリティ、クィア

1. カジキの「性別適合手術」

『河を渡って木立の中へ』（*Across the River and into the Trees*, 1950）の不評から一転して『老人と海』（*The Old Man and the Sea*, 1952）は記録的な売上を記録し、その後のピューリッツァー賞とノーベル賞の受賞に繋がった。この作品が好評を博したのは、男性的ヒーローとしての Ernest Hemingway（1899-1961）の復権を印象づける側面を持っていたことがひとつの理由として挙げられるだろう。だが、こうしたきわめて男性的な作家像は、『エデンの園』（*The Garden of Eden*, 1986）の死後出版によって、脱神話化されることとなる。そこで描かれる男女間の性役割の交代や同性愛、両性愛などが、それまで知られてきたヘミングウェイ＝マッチョな異性愛男性という公的イメージを打ち砕くには十分衝撃的だったからである。『エデンの園』と執筆時期も重複する『老人と海』は、こうした当時としてはラディカルともいえる流動的なジェンダーやセクシュアリティーにまつわる主題を果たして内包していないのだろうか。

サンティアゴが針に掛け、三日三晩にわたって格闘を繰り広げた「彼」や「兄弟」と言及される“marlin”（以下カジキ）については様々な象徴としての解釈がなされてきたが、

ヘミングウェイがいうように、そのカジキは果たして多義性を獲得しうる「本物以上に本物」といえるのだろうか[1]。本稿の 4 において詳述するが、生物学的事実に基づけばこのカジキは雌であり、おそらくそのことをヘミングウェイも、そしてサンティアゴも認識していたはずなのだ。だが、老漁師が格闘し、最期には心臓に銛を打ち込む対象がもし雌のカジキとして描かれていたとしたら、当然この物語はまったく異なったものになっていただろうし、今日のような評価はなされていないだろう。カジキに男性的な属性が付与されており、それと対峙するサンティアゴ＝ヘミングウェイの男性性も必然的に強化されるという構造があるからこそヘミングウェイは、科学的事実に反して雌のカジキを雄へと転換する「性別適合手術」を施さざるを得なかったとも考えられる。だが、『老人と海』と『エデンの園』の執筆時期が重なっていることも併せて考えれば、カジキに加えられたジェンダー操作の背後には、単なる男性性への執着以上の主題が潜んでいるようにも思われる。というのも、この「手術」が暴くのは、男性的属性を付与されたカジキと格闘する老人の「男らしさ」だけでなく、いわば雄 / 雌という性差を越境するトランスジェンダー的なカジキと自己同一化する老人（＝ヘミングウェイ）のクィアネスであるともいえるからだ。ヘミングウェイが *Paris Review* のインタビューにおいて、『老人と海』の執筆について “I've seen the marlin mate and know about that. So I leave that out . . . . But the knowledge is what makes the underwater part of the iceberg”（Plimpton 235-36）と語っていることを字義通りに受け取るのであれば、本作のカジキに対するジェンダー操作は意図的になされ、敢えて省略されることで、氷山の水面上の一角に威厳を与えているということになる。本論は、ヘミングウェイによってカジキに加えられたこの「性別適合手術」を手がかりとして、海上での老漁師の行動から垣間見える、海面下に潜むヘミングウェイのジェンダー観、セクシュアリティ観の一端を探る試みである。

2．寓話的読解とフェミニズム・ジェンダー批評

まず主だった先行研究を振り返りつつ、本作について十分に検討されていない点を明確化したい。『老人と海』出版当初は、新批評の影響力が未だ色濃く残っていた時代であったということもあり、主にキリストとサンティアゴの類似性を指摘するカーロス・ベイカーの批評を皮切りに（297-99）、その後しばらくは本作を聖書の寓話として読む試みや、聖書のシンボルを見いだす研究が数多く登場することとなる。また、クリスチャン・ヒーローとしてのサンティアゴが、自らの欲求に忠実に「世界中で誰も到達していない」沖合に出て、「魚を見つけ」、巨大魚と格闘する物語が、ヘミングウェイの真意は別としても、共産主義圏に対する自由主義、資本主義陣営の優越性を強く唱える冷戦下のアメリカ社会からは、歓迎を持って受け入れられたことは想像に難くない。すでに多くの先行研究が証明しているとおり、ヘミングウェイ自身が男性的なアメリカンヒーローを自ら演じた側面

もあるものの、こうしたパパ・ヘミングウェイという強い家父長的男性作家のイメージを上書きしたのはむしろ冷戦構造下にあったアメリカ社会の方でもあった。上述した聖書的解釈を行う批評群は、このような男性的クリスチャン・ヒーローとしてのサンティアゴ＝ヘミングウェイ像を構築し神話化する上で、大いに寄与したというべきだろう。

聖書の寓話的解釈と共に、書くことの寓話として『老人と海』を読む試みも、本作の出版直後よりなされてきた。初期の代表的な批評家の一人として、マーク・スコラーは、本作を、巨大魚を仕留める老人の道徳劇や聖書の寓話としてだけでなく、「主題を克服しようとする巨匠」の寓話としての側面を指摘している（ブルーム “Notes” 27）。またハロルド・ブルームも、ヘミングウェイ自身の理想像である「大著をものにしようとする小説家」の姿がサンティアゴに投影されているとする（ “Notes” 5）。だが、「ヘミングウェイの偉大さは短篇にある」とするブルームは、本作があまりに反復的で冗長だと手厳しい評価を下しつつ、感傷的で自己陶酔的な語りが繰り返されるが故に、書くことと聖書の寓話という二つの寓話をナラティヴが十分に支えきれていないと主張する（ “Interpretations” 1-3）。こうしたサンティアゴ＝ヘミングウェイとする読みの多くは、『老人と海』の寓話性を指摘するのみに留まっていたものの、サンティアゴに投影されるヘミングウェイ自身のジェンダー観や老いについての問題へとも接続可能な主題を内包していることを考えれば、その後の批評の発展には少なからず貢献したといえるだろう。

70 年代以降のフェミニズム、ジェンダー批評の多くは当初、ヘミングウェイの女性表象を批判的に論じ、作品が内包するミソジニーを暴く類のものであった。『老人と海』に関する研究についてもそれは当てはまる。たとえば、マーティン・スワンは、上述したアレゴリカルな読みを踏襲しつつ、物語最後に登場する女性観光客が、サンティアゴが仕留めたカジキ、つまり作家の偉業を「誤読する」軽率で理解力のない女性として描写されていることを批判的に取り上げている（ブルーム “Notes” 57）[2]。

ゲイリー・ブレナーもまた、サンティアゴが攻撃性の一形態としてミソジニーを内面化していることを批判的に取り上げている。その一例として、サンティアゴが「彼」と男性化して言及する “man-of-war bird” がカジキへと導いてくれるありがたい存在だと述べる一方で、“Portuguese man-of-war” については、“whore” と罵りつつ女性化している点を挙げる（ブルーム “Interpretations” 112）。また、サンティアゴが女性名詞で言及される海への愛着を表明しつつも、同時に「酷いいじわるをする」存在であると述べている点を指摘する（ブルーム “Interpretations” 113）。こうしたサンティアゴのミソジニーが、オイディプス的欲望を禁じられたが故に生じる同性との自己同一化、そして潜在的な同性愛的傾向に対する自己嫌悪に起因しており、サンティアゴ（＝ヘミングウェイ）は「女性に対する無意識の憎悪と自己に内在する女性的特徴の存在の両方を否定しようとしている」ことを指摘している。だが、ブレナーが「サンティアゴの潜在的同性愛はまた、正常な異性愛者への成長からマノリンを遠ざけ」というとき、ブレナーの主張自体があくまでも

異性愛規範に基づいているという点は、今後批判的に再検証されるべきだろう（ブルーム “Interpretations” 120-22）。

スーザン・F・ビーゲルは、エコクリティシズム的視点を取り入れた「サンティアゴと永遠の女性」において、女性化された海と老漁師のロマンスとして本作を読む。ビーゲルは、海や海洋生物のジェンダー化に着目しつつ、そこにヘミングウェイのミソジニー的傾向を読み取るのではなく、サンティアゴの漁における環境倫理的側面を評価している。男性が、処女地として自然を女性化することで支配し簒奪することを正当化しつつ、母なる大地からは永遠の許しを請うてきたことを批判するエコフェミニズムにビーゲルは反論し、自然を男性化し敵や競争相手と見做すことこそが真の罪であるとヘミングウェイが主張している点を強調する（ブルーム “Interpretations” 154）。こうした自然の男性化に関係して、ビーゲルは、老人がカジキに対して「兄弟」と呼びかけていることについて、“brother” という語がジェンダーを特定する語ではないとして、「鳥、獣、魚とともに、男と女、夫と妻が共存するエデンへの憧れを反映している」（ブルーム “Interpretations” 160）とする。また、“Fish . . . I’ll stay with you until I am dead”（52）というカジキに対するサンティアゴの独白を例に挙げ、ビーゲルがここに両者の結婚を読み取っている点は興味深い。だが、他の論文から判断すれば、『老人と海』のカジキが雌であったことをビーゲルは認識しているはずなのだが、カジキのジェンダーについてそれ以上追求していない。

ここまで概観した『老人と海』に関する批評はいずれも、基本的には異性愛規範という制度を前提としており、男 / 女、異性愛 / 同性愛という二項対立に疑問を提示するクィアな視点が欠けているようにも思われる。ヘミングウェイの他の作品におけるジェンダーやセクシュアリティの問題に関しては、マーク・スピルカが提唱したヘミングウェイの両性具有性を敷衍しつつ、ナンシー・R・カムリーとロバート・スコールズは、ヘミングウェイの同性愛を含むより複雑なセクシュアリティを読み取ろうとしている。一方でデブラ・モデルモグは、そのような読みを批判的に捉え、カムリーらの主張が、結局のところ男 / 女という二項対立に軸足を置いており、結果的には男らしさ、女らしさという二元論を復権、固定してしまう懸念を表明する。モデルモグは、いわばこうした異性愛や男女という基盤を拠り所としないような視点から、新たなヘミングウェイ像を構築しようとしている。こうしたクィアな視点が導入されることで、ヘミングウェイ批評は新たな局面を迎えているといえるが、長らく男性性礼賛の物語と読まれてきたためか、『老人と海』が、こうした文脈のなかで十分に論じられているとはいい難い。

3. カジキと男性性

ヘミングウェイの複雑なジェンダーやセクシュアリティの主題を内包する『エデンの園』、「エリオット夫妻」、「簡単な質問」などの作品群とは異なって、『老人と海』は前節

で確認したとおり、フェミニズム、ジェンダー批評から批判的に取り上げられることはあっても、従来どおりの異性愛者としてのヘミングウェイ像をむしろ強化するものであった。「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」や『日はまた昇る』、『武器よさらば』などヘミングウェイの他の多くの作品と同様に、『老人と海』もまた、男性性への執着とその喪失の不安の物語として読むことはもちろん可能だ。本節ではまずそのような先行研究に則って読みを提示した上で、次節においてその読みがどのように破綻するのかを確認していきたい。

老いを謙虚に受け入れ、“He no longer dreamed of storms, nor of women, nor of great occurrences, nor of great fish, nor fights, nor contests of strength, nor of his wife.”（12）というサンティアゴは精神的にも身体的にも紛れもなく老人だが、その目には不屈の闘志が宿り、未だ希望も自信も失っておらず、八十四日に及ぶ不漁に挫けることもなく、彼はカジキを追い求め一人漁に出る。知識と経験に裏打ちされた技術の限りを尽くして、ついにいわば男性性の権化、あるいはファリックシンボルともいうべき大魚を針に掛けるが、不思議なことに針掛かりする前、魚が餌にじゃれついている時すでに、サンティアゴには魚の雌雄が判別している。

> One hundred fathoms down a marlin was eating the sardines that covered the point and the shank of the hook where the hand-forged hook projected from the head of the small tuna. The old man held the line delicately, and softly, with his left hand, unleashed it from the stick. Now he could let it run through his fingers without the fish feeling any tension. This far out, he must be huge in this month, he thought.（23、下線筆者）

ここでカジキに言及する際に「彼」という男性の代名詞を用いているのは、スペイン語で魚を意味する“pez”が男性名詞であるからだともいえるが、marlin を意味する“aguja”は女性名詞であることを考えれば、この説は成立しない。前節で述べたとおり、サンティアゴによるこの性別判定の不可解さを最初に指摘したウィークスは、生物学者の知見に基づいて、外部形態からカジキは雌雄の判別ができないという事実に言及しつつ、ヘミングウェイがリアリズムを犠牲にしてまでカジキを雄化したことの理由として、ヘミングウェイのヒーローが常に雄の動物と対峙することで自分の「男らしさ」を推し測る傾向を挙げている（45）。4において確認するカジキの分類に関する事実と読み比べると、ヘミングウェイは、（そして数多くの大魚を解体してきたであろうサンティアゴも）大型化するカジキがすべて雌であることを知りつつも、意図的にサンティアゴのカジキに「性別適合手術」を施したといえるだろう。その理由はウィークスが指摘するとおり、男性性を表すカジキの象徴性を強調することで、それと対峙するサンティアゴの男性性も自ずと強化されるからである。

だが、カジキをもって、サンティアゴの男らしさを強化する男性性の象徴とするのであれば、カジキとの自己同一化の希求とともに、対象を獲得するためにはその対象を殺さねばならないという漁師としては当然の事実に直面し、葛藤が老人の中に生じる。格闘をとおしてサンティアゴはカジキに対して「兄弟」としての親近感を抱き、“I wish I was the fish, he thought, with everything he has against only my will and my intelligence.”（39）と自己同一化を願い、やがては頭が混乱し“. . . is he bringing me in or am I bringing him in?”（63）と一本の釣り糸によって結ばれた老人と魚の主客は混乱をきたす。

> You are killing me, fish, the old man thought. But you have a right to. Never have I seen a greater, or more beautiful, or a calmer or more noble thing than you, brother. Come on and kill me. I do not care who kills who.（58）

男性性の具現化である獲物を獲得するためにはその対象自体を殺さなくてはならないという葛藤は、ウィークスがいうようにサンティアゴの「男らしさ」を読者に印象づけると共に、同時に同性愛を想起させる男性性への憧れが生じるが故に、その対象自体を殺さざるを得ないという葛藤も露呈する。浮上した巨大なカジキに銛を打ち込むことで老人と魚はついに合一を果たすが、そのシーンは性的合一を思わせるイメージとともに、高野泰志も指摘するように射精を思わせる描写がなされている（199）。

> The old man dropped the line and put his foot on it and lifted the harpoon as high as he could and drove it down with all his strength, and more strength he had just summoned, into the fish’s side just behind the great chest fin that rose high in the air to the altitude of the man’s chest. He felt the iron go in and he leaned on it and drove it further and then pushed all his weight after it.
>
> Then the fish came alive, with his death in him, and rose high out of the water showing all his great length and width and all his power and his beauty. He seemed to hang in the air above the old man in the skiff. Then he fell into the water with a crash that sent spray over the old man and over all of the skiff.（59-60）

男性性の象徴ともいうべき対象を獲得するために殺す行為が、それを見るもの（読者）に対しては老人の「男らしさ」を誇示しつつ、その行為が性的合一や射精のイメージと共に語られるとき、ヘミングウェイの複雑なジェンダー意識が露呈する。つまり、「サンティアゴ＝ヘミングウェイ」は、聴衆である読者に対しては異性愛者としての強い男を演じつつ、同時に彼自身を強い男に見せる男性性の象徴たる対象と自己同一化するという同性愛的欲望も同時に露呈せざるをえない。だが強い異性愛者を演じようとすれば、同時に同

性愛的欲望を向ける対象それ自体を殺さねばならないのであり、その強い葛藤こそがこの物語の核心である。

しかし当然のことながら性的な合一感と共に描かれる男性性の殺害と獲得というこのクライマックスで物語は終わらない。戦利品としての男性性の血肉は、サメによって奪われていくことになる。頭と尾を残し、骨だけとなったカジキがなにを象徴するかについては論者によって大きく意見が分かれるところではあるが、それだけ解釈の多義性を生む。このカジキの骨について「疲労した男根」の象徴として読むスワンは、カジキの骨をサメの骨と誤読し、サンティアゴの偉業を卑しめる女性が登場するこの場面には、ヘミングウェイのミソジニーが表れているとしている(57)。ストリーキャッシュは、すでにサンティアゴの男性性の獲得は成し遂げられた以上、その男らしい行動を再評価させるためにわざわざこの骨を村に持ちかえることの余剰性を指摘している(199)。ストリーキャッシュを援用する形で、その余剰性をヘミングウェイの老いの兆候として批判的に論じた論考の中で、前田一平はカジキの骨について「肉も皮も内臓もそぎ落とされた、究極のシンプルネスたる骸骨は、第一にヘミングウェイの創作技法＜氷山の象徴原理＞の実演である」（251）と説明する。ヘミングウェイの作品において、身体的に傷つくことの背後には、男性性の誇示と表裏一体となったマゾヒスティックな欲望が隠蔽されていることを指摘する高野は、前田の論を追認しつつも、骨を持ちかえるべきではなかったとする主張には反論し、「魚の骨は背後のマゾヒズムを隠蔽するために」サンティアゴの男性性の象徴として誤読されるために持ち帰られたのであると主張する。（203-04）

カジキの骨を、男根や男性性の象徴、あるいはそれを最も端的に言語化したヘミングウェイの文体や創作技法の象徴とするといった解釈はそれぞれ説得力を持つ。だが、陸に持ちかえられ浜辺に打ち捨てられたのはあくまでも骨であり、血肉を奪われた残骸、いわば身体性を欠いた男性性の残渣であるという点には注意を払うべきだろう。サンティアゴが夢で見る穏やかなライオンの姿は、戦利品としての男性性を喪失しその事実を受容したサンティアゴ自身の姿でもある。“A man can be destroyed but not defeated.”（103）という一節は格言のごとく「男らしい」ヘミングウェイとオーバーラップするセリフとして一人歩きしている感があるが、実際にはサンティアゴは負けているし、カジキに負けた訳ではないにせよ “They beat me, Manolin,” he said. “They truly beat me.”（80）とサンティアゴ自身が敗北を認め受容しているのである。このように読むならば、『老人と海』は、一人の老人による男性性の再獲得と喪失 / 敗北の受容の物語を軸にしたヘミングウェイのジェンダー観にまつわる主題が多分に含まれた作品であるといえるだろう。このことが逆説的に示唆するのは、男性性という属性が、普遍的で固定的な属性ではなく、むしろ他者から付与され、流動的に変異する可能性を秘めた性質を帯びているということである。さらに次節への繋ぎとして最後にひとこと付言するならば、『老人と海』が「氷山の水面下を形成」しているというヘミングウェイのカジキの知識と共に読まれるならば、トランスジェ

ンダー的性質を帯びたカジキの獲得を希求し自己同一化するサンティアゴの行動には、男性性の追求を偽装したクィアネスの追求の物語としての側面を秘めている可能性が浮かび上がってくる。

4．カジキの分類学

『老人と海』を寓意的に解釈してきた先行研究の多くは、サンティアゴと格闘するカジキの種の特定についてはほとんど重要視してこなかった。例えばサンティアゴが釣った魚を「マカジキ」とする日本国内の研究は多いが、『ナショナルジオグラフィック』誌のウェブサイトは「クロカジキ」としている。クロカジキとマカジキが同じマカジキ科に分類されるという点においては、「マカジキ」という記述が完全な誤認とまではいえないまでも、両種は種レベルだけでなく属レベルで異なる分類がなされている点には留意すべきだ。このような混乱が生じる原因の一端は、カジキ亜科の魚の分類には紆余曲折があり、魚類学研究者たちによってこれまで頻繁に学名が変更されてきたことにもあるだろう。それに加え、カジキの英語名と和名が著しく紛らわしいことも混乱の一因として挙げられるかもしれない。例えば英名 “black marlin”（学名 *Istiompax indica*）に相当する和名は「シロカジキ」、英名 “blue marlin”（学名 *Makaira nigricans*）の和名は「クロカジキ」である[3]。また、漁業者が用いるローカルな呼称と学術的な呼称との間にもズレがあることがこうした紛らわしさに拍車をかけているものと思われる。だが、ヘミングウェイ研究には膨大な知識の蓄積があるにもかかわらず、こうしたカジキの分類学に十分な関心が向けられてきたとは言い難い。本節では、まずカジキ亜科に分類される魚のうちマーリンと呼ばれる魚の分類について、唯一といって良いビーゲルによる先行研究を確認する。そのうえで、ヘミングウェイが、『老人と海』のカジキについてどの種を念頭においていたのかを特定したうえで、科学的リアリズムと創作上の演出との間で、ヘミングウェイがどのようにバランスを取り、どの程度真面目に「本物の魚」を描いているかについて考察する。

『老人と海』のなかで、ヘミングウェイはおそらくは意図的に、魚の種を限定して記述せず、総称的に “marlin” とサンティアゴに呼ばせている。『エスクァイア』誌に投稿した釣りに関する 1934 年の記事、「海流に乗って」（“Out in the Stream: A Cuban Letter”）の中では、カジキの分類や生態について非常に豊富な知識をヘミングウェイは披露しており、「ホワイトマーリン」、「ストライプトマーリン」、「ブラックマーリン」、「シルバーマーリン」、「ブルーマーリン」という五種類のマーリンの名を挙げ、それぞれの大きさから、キューバ近海に現れる時期や釣りの対象魚としての価値などについて詳細に記述している（109-15）[4]。ヘミングウェイは、このうち最初の四種は同一種の性別や成長段階に応じた変異ではないかと予想しており、五つ目の「ブルーマーリン」については、他の四種との関係は「分からない」としている（113-14）。だが、これら五種類のマーリンは、今日

学術的に用いられる一般的な英語名称に対応しているわけでは必ずしもない。

こうした錯綜したカジキの分類に関して、最新の生物学的見地からビーゲルは「アーネスト・ヘミングウェイの『老人と海』における海洋生物ガイド」において『老人と海』に登場する海洋生物に関して詳細で正確な検証を行っている。ビーゲルによれば、ミトコンドリア DNA 解析によって種の特定を試みる今日の分類学では、マーリンと呼ばれる種は世界に四種おり[5]、キューバ沖に生息するのは英名 “blue marlin”（学名 *Makaira nigricans*、和名「クロカジキ」）と英名 “white marlin”（学名 *Tetrapturus albidus*、和名「（ニシ）マカジキ」）の二種のみだという。また、先に挙げたヘミングウェイのいう五種のマーリンのうち「ホワイトマーリン」以外はすべて同一種のバリエーションであり、クロカジキ（“blue marlin” *Makaira nigrican*）であるとしている（270）。こうした最新の分類学的成果をふんだんに引用しつつ、ビーゲルはそのサイズからも、サンティアゴが針にかけた魚は、クロカジキ以外あり得ないと断定しており、本論もこの説を支持する（268）。また、ヘミングウェイの時代には、このクロカジキが、科学的名称とは異なって “Cuban black marlin” や時には “striped marlin” と呼ばれていた事実をビーゲルは紹介している（268-69）。それに加え、“blue marlin” は雌の方が巨大化するという重要な事実を引用し、「モロー沖のマーリン」“Marlin off the Morro” においてヘミングウェイが記載している事実と『老人と海』における記述の齟齬を指摘している。

5. クィアなカジキ

針掛かりした後のファイトについて詳細に報告した「キューバ沖のカジキ」“Marlin off Cuba” において、ヘミングウェイは、対象魚として惚れ込む雄の「ストライプトマーリン」の男性的属性を賞揚し特権化する一方で、大型化した雌の「ブラックマーリン」と「ブルーマーリン」については “[A]s a sporting fish they（black and blue marlin）can never, . . . rank with the striped marlin.” であり、“These same fishermen call the blue and black marlin ‘bobos,’ or fools. ”（66）と記述し、露骨なミソジニーを露呈している。だが、こうした男 / 女、雄 / 雌という二項対立に基づいてあからさまに前者に執着する従来のヘミングウェイ像ではなく、本論が着目したいのはヘミングウェイが『老人と海』のカジキに、トランスジェンダー的とでもいうべき特質を付与していた点である。

『老人と海』におけるカジキは、針掛かりした後の暴れ方や外部形態については、ヘミングウェイがいうところの雄の「ストライプトマーリン」の属性があてがわれている。先にも述べたとおり、『老人と海』のカジキは生物学的には雌のクロカジキであるが、ヘミングウェイは、“He is much fish still and I saw that the hook was in the corner of his mouth and he has kept his mouth tight shut.”（47）と雄のカジキとして描写し、口を閉じた状態で抵抗することを強調している。また、釣り上げた後も、“With his mouth shut and his tail

straight up and down we sail like brothers. Then his head started to become a little unclear and he thought, is he bringing me in or am I bringing him in?”（63、下線筆者）と口を閉じていることが、サンティアゴと魚が自己同一化することの契機となっている。釣りに関するエッセイである “Marlin off Cuba” においてもまた、針掛かりした後の雄の「ストライプトマーリン」について “The striped marlin fights with his mouth tight shut on the leader and . . . jumps with his mouth tightly shut, while the blue or black marlin almost invariably jumps with his mouth wide open.”（66）とし、大型化する雌の「ブルーやブラックマーリン」は口を開けて跳躍する点を指摘している。つまり『老人と海』のカジキは、巨大であるという点においては雌の「ブラックマーリン」や「ブルーマーリン」である一方で、釣りの対象魚としてはヘミングウェイが価値を置く雄の「ストライプトマーリン」両方の特性を有していることになる。サンティアゴが回想する、カジキの異性愛カップルの悲劇的ロマンス[6]とは異なって、サンティアゴの獲物のカジキは、表面的には男性的属性が付与されてはいるものの、実際にはトランスジェンダー的な存在であるといえるだろう。

クロダイやハタ科の魚など日本国内の身近な魚において、一部の種が成長の過程で雄から雌に、雌から雄に変化することが知られているが（『日本の海水魚』254、354）、ヘミングウェイはこうした変異がカジキにも見られるのではないかと推測し、1934 年の『エスクァイア』の記事では以下のように述べている。

> Curiosity, I suppose, is what makes you fish as much as anything and here is a very curious thing. This time last year we caught a striped marlin with a roe in it. It wasn’t much of a roe it is true. It was the sort of a roe you would expect to find in certain moving picture actresses if they had roe, or in many actors. Examining it carefully it looked about like the sort of roe an interior decorator would have if he decided to declare himself and roe out. But it was a roe and the first one any of the commercial fishermen had ever seen in a striped marlin.
>
> Until we saw this roe, . . . all striped marlin were supposed to be males. . . . . Was this striped marlin how shall we put it or, as I had believed for a long time, do all marlin, white, striped, silver, etc. end their lives as black marlin, becoming females in the process? The jewfish becomes a female in the last of its life no matter how it starts and <u>I believe the marlin does the same thing</u>. The real black marlin are all old fish. You can see it in the quality of the flesh, the coarseness of the bill, and, above all in fighting them, in the way they live. Certainly they grow to nearly a ton in weight. But to me they are all old fish, all represent the last stages of the marlin, and they are all females.（“Out in the Stream: A Cuban Letter” 115、下線筆者）

ここでヘミングウェイは、雄 / 雌、男 / 女という二項対立に基づいたジェンダー観を転覆させかねない事柄に関しても隠蔽することなくジャーナリスト的、科学者的態度で記述している。現代の生物学的知見に基づけば、ヘミングウェイの推測とは異なって、カジキがジェンダーを転換するという事実はない。だが、成長の過程で一部の魚類のジェンダーが流動的に変異することを知っており、またそれがカジキにも当てはまると（誤認ではあるにせよ）ヘミングウェイが信じていたことは、人間の流動的なジェンダーについての彼の発想とも根底では繋がっているように思われる。性役割の交代や同性愛、両性愛など、異性愛規範から見れば「逸脱した」と考えられるセクシュアリティを主題とした『エデンの園』が、部分的ではあるにせよ『老人と海』とも同時期に執筆されていたことを併せて考えれば、この点は今後詳細に検討されるべき課題だろう。

これまで確認したように、ヘミングウェイの釣りに関する紀行文などのテクストと共に読まれると、『老人と海』はそれが書かれた時代の異性愛制度に基づくジェンダー規範に準拠しつつも、『エデンの園』と同じようにその規範を逸脱する要素を多分に秘めており、この作品に組み込まれた老漁師とカジキの物語からは、ヘミングウェイ自身のジェンダー、セクシュアリティ観の一端が垣間見える。男性性の追求、獲得、喪失 / 敗北、そしてその受容を描くこの物語における老人の身振りには、読者には不屈の「男らしさ」を誇示しつつも、同時にその男らしさを獲得するためには、不可避的に生じる自らが唾棄した同性愛的欲望故に、自らが希求する対象それ自体を殺さなくてはならないという二重性と葛藤が存在する。ヘミングウェイがカジキに施したジェンダー操作によって詳らかにされるのは、カジキのジェンダーも人間のジェンダーやセクシュアリティも、同語反復的な表現となるが、後天的に獲得される流動的かつ相対的な性質であり、生来の固定的な性質ではないということである。つまり、一見したところヘミングウェイがカジキのジェンダーを雌から雄へと意図的に操作することで、『老人と海』のテクストを異性愛規範へと馴化させているかにも見えるが、却ってその人為的操作自体によって、操作されうるジェンダーそれ自体の固定的普遍性を否定し、その虚構性や流動性を証明する物語になってしまうともいえるのだ。「性別適合手術」によって誕生するクィアなカジキの存在は、翻ってそれと自己同一化するサンティアゴ＝ヘミングウェイのジェンダーやセクシュアリティの固定性を揺るがす可能性を秘めている。この物語の海面上に見える氷山の一角が、男性的異性愛者としてのヘミングウェイ像を強化するものだとすれば、海面下に隠れた八分の七の部分は、そのような異性愛規範に忠実であろうとした作家像を転覆させる可能性を秘めている。

注

1. “I tried to make a real old man, a real boy, a real sea and a real fish and real sharks. But if I made them good and true enough they would mean many things. The hardest thing is

to make something really true and sometimes truer than true. ”（qtd. in Baker 323）

2. だが女性がカジキをサメと誤読することはともかく“I didn’t know sharks had such handsome, beautifully formed tails.”（82）と述べる女性が、その尾鰭の美しさに気がついていることをスワンが無視していることは問題だろう。
3. 学名、英名、和名の対応については情報の新旧によって大きな錯綜が見られるが、マカジキ科の最新の分類については、J-Global のウェブサイトでそれぞれの名称を検索し、魚類学に関する近年の論文における呼称を参照するのがもっとも正確であると思われる。
4. これらヘミングウェイによる種名は、今日の学術的な分類とは大きく異なっているため、本稿ではヘミングウェイによる呼称に言及する際は「」カギ括弧に入れて記載し、学術的な和名に言及する際には　カギ括弧なしでそのまま表記する。ヘミングウェイの著作から直接引用する際にもカギ括弧を用いない。
5. ニシクロカジキとクロカジキを別種とする説もあるが、近年の DNA 分析に基づいた分類において両者は同一種とされる。（ビーゲル「ガイド」268）。
6. “He remembered the time he had hooked one of a pair of marlin. The male fish always let the female fish feed first and the hooked fish, the female, made a wild, panic-stricken, despairing fight that soon exhausted her, and all the time the male had stayed with her, crossing the line and circling with her on the surface.”（28-29）

引用・参考文献

Baker, Carlos. *Hemingway, the Writer as Artist*. 4th ed. Princeton, NJ: Princeton UP, 1972.

Beegel, Susan F. “A Guide to the Marine Life in Ernest Hemingway’s *The Old Man and the Sea*.” *Resources for American Literary Study*, vol. 30, 2005, pp. 236–315. JSTOR, http://www.jstor.org/stable/26366995. Accessed 4 Feb. 2023.

— . “Santiago and the Eternal Feminine: Gendering La Mar in *The Old Man and the Sea*.” *Bloom’s Modern Critical Interpretations: The Old Man and the Sea - New Edition*. Ed. Harold Bloom, New York, NY: Bloom’s Literary Criticism, 2008.

Bloom, Harold, ed. *Bloom’s Modern Critical Interpretations: The Old Man and the Sea - New Edition*. New York, NY: Bloom’s Literary Criticism, 2008.

— . *Bloom’s Notes: Ernest Hemingway’s The Old Man and the Sea*. Broomall, Pennsylvania: Chelsea House Publishers, 1999.

Brenner, Gerry. “Psychology.” *Bloom’s Modern Critical Interpretations: The Old Man and the Sea - New Edition*. Ed. Harold Bloom, New York, NY: Bloom’s Literary Criticism, 2008.

Comley, Nancy R., & Robert Scholes. *Hemingway’s Genders: Rereading the Hemingway Text*. New Haven: Yale UP, 1994. 『ヘミングウェイのジェンダー－ヘミングウェイ・テクスト再読』

日下洋右監訳、英宝社、2001 年。

Hemingway, Ernest. *The Old Man and the Sea: The Hemingway Library Edition*. New York, NY: Scribner's, 2020.

— . *Hemingway on Fishing*. New York, NY: Scribner's, 2000.

— . "Marlin off Cuba." *American Big Game Fishing*. Ed. Eugene V. Connett III, New York, NY: The Derrydale P, Lanham, MD, 1999.

Moddelmog, Debra *A. Reading Desire: In Pursuit of Ernest Hemingway*. Ithaca, New York: Cornell UP, 1999.『欲望を読む』島村法夫、小笠原亜衣訳、松柏社、2003。

Nakamura, Izumi. "FAO species catalogue. Vol. 5. Billfishes of the world: An Annotated and Illustrated Catalogue of Marlins, Sailfishes, Spearfishes and Swordfishes Known to Date." *FAO Fisheries Synopsis* No. 125, Vol. 5, 1985, pp. 1–65. Food and Agriculture Organization of the United Nations, https://www.fao.org/3/ac480e/ac480e.pdf. Accessed 4 Feb. 2023.

Plimpton, George, ed. *Writers at Work: The Paris Review Interviews, Second Series*. Harmondsworth, London, Penguin, 1977.

Schorer, Mark. "*The Old Man and the Sea* as Fable." *Bloom's Notes: Ernest Hemingway's The Old Man and the Sea*. Ed. Harold Bloom, Broomall, Pennsylvania: Chelsea House Publishers, 1999.

Spilka, Mark. *Hemingway's Quarrel with Androgyny*. Lincoln: U of Nebraska P, 1990.

Strychacz, Thomas. "'Big Two-Hearted River' and *The Old Man and the Sea*." *Bloom's Modern Critical Interpretations: The Old Man and the Sea - New Edition*. Ed. Harold Bloom, New York, NY: Bloom's Literary Criticism, 2008.

Swan, Martin. "On Women in *The Old Man and the Sea*." *Bloom's Notes: Ernest Hemingway's The Old Man and the Sea*. Ed. Harold Bloom, Broomall, Pennsylvania: Chelsea House Publishers, 1999.

Weeks, Robert P. "Fakery in *The Old Man and the Sea*." *Understanding The Old Man and the Sea: A Student Casebook to Issues, Sources, and Historical Documents*. Ed. Patricia Dunlavy Valenti, Westport, CT: Greenwood P, 2002.

"Blue Marlin | *Animals*." *National Geographic*, Accessed 4 Feb. 2023. www.nationalgeographic.com/animals/fish/facts/blue-marlin.「クロカジキ | 動物大図鑑」『ナショナル ジオグラフィック』、Accessed 4 Feb. 2023. natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/20141218/429047.

J-Global, Accessed 4 Feb. 2023. jglobal.jst.go.jp/.

今村楯夫・島村法夫 監修、『ヘミングウェイ大事典』、勉誠出版、2012 年。

岡村収、尼岡邦夫編、『山溪カラー名鑑　日本の海水魚』 山と溪谷社、1997 年。

高野泰志、『アーネスト・ヘミングウェイ、神との対話』、松籟社、2015 年。

前田一平、「小学校六年生の『老人と海』」『ヘミングウェイと老い』松籟社、2013 年。

松島千雅子、『クィア物語論』人文書院、2009 年。

吉川純子、「冷戦と『男らしさ』という幻－ヘミングウェイのメディア・イメージ」『憑依する英語圏テクスト－亡霊・血・まぼろし』福田恵子、上野直子、松井優子編、音羽書房鶴見書店、2018 年。